幼稚園をいやがる子どもの事例

玉井収介

幼稚園をいやがる子どもにはいろいろあります。その原因によって取り扱いも一様ではありません。
どんなものがあるか例をあげながら考えてみましょう。

1、知能のおくれのある場合

知能がおくれているために友だちについていけない。いじめられる。友だちができないなどのためにいやになってしまうものがあります。これはかなり数も多いものなので長い経験をおもちの先生は一人や二人は体験されていると思います。

こういうのは本質的なおくれがひどいのでしたら、普通の幼稚園児の年令で幼稚園にあげることの方が無理だといえましょう。程度にもよりけりですが、この年令ではっきりとちえおくれのわかるほどはげしいものは、無理をすると、かえってよくないことがあります。

2、保護されすぎていた子

つぎには、あまり保護されすぎていて自立性がなくなってしまった子というのもあります。

たとえば、S子は、われわれの相談室にきたときはもう大きくなっていましたがやはり学校にいけないという問題できました。そして、その問題はもう幼稚園のころからはじまっていたというのです。

結婚後十年目、もう子どもにはめぐまれないものとあきらめていたときに生まれた子でした。もともと結婚もおそかった両親ですからS子はまるで、はじめから一人っ子ときめられていた子のようで

した。ですから、両親も世話のやきすぎという傾向になりがちであったこともやむを得ないでしょう。

しかし、その上にS子の場合にはおばあさんと奥さんに先立たれたおじさんがありました。この二人がねこかわいがりというわけです。こうして、あつい保護のカベの中で、求めないうちから何もかも与えられるようなかたちになりました。

お母さんの話によるとS子は小さいころ、よその赤ちゃん、自分より小さい子をこわがったといわれます。赤ちゃんが近づいてくるとお母さんのひざやおじさんのひざに逃げてきたというのです。子どもがこわがるものにもいろいろありますが、まず赤ちゃんがこわいというのは珍らしいでしょう。いかにS子が、おとなばかりの間で、いくつになっても赤ちゃんだったかがわかります。

ごはんをたべること、ねること、着物をきること、何一つ自分でする必要のなかったS子は、やがて自分でするという欲求をもたない子になっていきました。

できもしないことを自分でしたがるというのは赤ん坊の特徴です。もてもしないはしでつついてみたり、とどかないところへ登ろうとしたりする。おかげで食べものはこぼれるし、茶わんはわれるし、障子は破れるし、といった騒ぎは赤ちゃんのいる家ならどこでも毎日くりかえされています。

それは全く困ったおいたとおとなの目にはうつります。でもその中で子どもは自分でするという大切な態度を身につけていくのです。

何でも与えられているS子は、自分の要求がおきる前に与えられていたのかもしれません。いや、もしかすると、S子もそれなりに自分でしたいという要求の芽生えをもっていたのかもしれませんが、それはまわりのおとなの目からはおいたとうつってとめられたのかもしれません。そしてS子はそれに反抗することをやめて、自分でしたいという要求をすてることによって、まわりの保護という名のあついカベの中で安住してしまったのかもしれません。そうして自分では何にもしない子が生まれていきました。

このS子が家庭をはなれて一人で幼稚園にいけるはずがないことは容易に想像されるでしょう。

3、似ているけれど少しちがった例

M子もやっぱり幼稚園にいけない子でした。兄が一人、M子が真ん中で下に一人妹がいます。兄とは少しはなれていましたので久しぶりのかわいい子だったことはS子と同じでした。

ただ、M子の御両親はM子が幼ないころ、互にしっくりいっていなかったようです。それがなぜであったか、それは今は用のないことですが、お父さんが上の男の子をかわいがられていた反動でしょうか、お母さんはよけいにM子をかわいがられました。その上に、

この子が育った時期が戦後の食料難の時代であったこともお母さんの気持に拍車をかけたようです。兄のようにはよくしてやれなかったという悔恨は、この子がやや病弱であったこともお母さんには食料不足の時期に育ったことが原因であったように思われました。というより、非常にうがった見方をすると、お母さまのこの子をかわいがりたいという気持が先にあって、この子の病弱を利用されていたともみられないことはありません。つまり、病弱であればよけいに世話が必要なので、お母さんは、兄との差別をつけるという意識を伴うことなくこの子をかわいがることができたのです。

ともかくこうして、母親からはなれない子というより、お母さんの方がはなしたがらない子が生まれてきました。

お母さんはこの子をお使いに出すとかえりをまっていることができなくて迎えにいかれたそうです。無事にいってこられない子だからというのが理由ですし、お母さんがそう信じておられるのは事実ですが、無意識のうちにお母さんの心の中に、この子が一人でお使いができる子、つまりお母さんの世話のいらない子であってくれては困るという気持が働らいていたとはいえないでしょうか。

こうなれば、この子もまた幼稚園をいやがる子、というより、一人ではいかれない子になっていっても当然だといえましょう。

4、几帳面でけっぺきすぎた子

こんどは少しちがった例をあげてみましょう。

N子は、小学校一年に入って二か月ほどしたとき相談室をおとずれました。理由は学校へいかないというのです。ですが、幼稚園のころも同じようだったといいます。

この子の場合は少しちがっていました。

この子は非常に几帳面で、けっぺきな子でした。出したものは片づけずにはいられないという子でした。こんなくせはむしろ結構なくせで、大ていのお母さんが何とか習慣づけようとしていらっしゃることです。でも、ものには限度があります。放りぱなしのだらしなさも困りますが、片づけすぎも困ります。出したものを片づけるのはいいとして、この子のは出す前に片づけるのです。つまり片づけ方が徹底していて、抽出しの中の、右に何があって左に何があって、真ん中に何があるのかまで、もとどおりにしなければならないのです。これでは、心配で二つのものが同時には出せないのも道理です。

こうしておもちゃも出せない。もちろんこわすこともできないということになりました。

ところで、こういう性質はほかにも関係してきます。ねる前には脱いだ着物も同じたたみ方で、同じ順序で、フトンの同じ角にたたんでおかなければ気がすまない。着物に少しでもシミがあっては気がすまないということになります。

この調子で幼稚園や学校にいったらどういうことになるでしょう。

家の中では、両親やきょうだいばかりですから、面倒くさいと思っても気のすむようにしてくれるので、まだまだ納得できるまで整理もできたかもしれません。ところが、幼稚園ではちがいます。そんなことおかまいなしの友達がたくさんいますし、先生も、お母さんのように徹底的に世話して下さるわけにはいきません。

こうして、だんだん幼稚園にはいたたまれなくなってきました。だんだん逃げかえるようになり、たまらなくなると爆発的に泣くようになりました。でもそれは、ほかの人にはわからない理由ですからどうしようもありません。

気にするなといわれれば、ますますたまりません。こうして気ちがいじみたバカさわぎの子ができあがり、そして登園を拒むようになってしまったのです。

今までみてきたなかで、知能のおくれのある子どもの場合はしばらく別として、その他はいずれも親子関係のもつれに原因があることがみられます。これは、ただ、幼稚園にはきたがらない子ばかりでなく、多くの問題に共通してみられることなのですが、最後の例などは子どもの性格のかたよりも相当はげしかったのですが、そのような性格が形成されていった経過には母親の性格とその養育態度が大きな要因になっていました。

この小論の中では取り扱いの方法については全くふれないできましたが、ここにあげたような重い例になると、ただ子どもだけをはげましたり、元気づけようとしたりしていてもあまり効果のないことは容易に理解されると思います。親の指導、あるいは治療ということが考えられなければならないわけです。

もっともこれらの例でも幼稚園のころに適切な処置がとられていればここまで深刻化する前に解決していたともいえましょう。

学校にいけないという症状をもつ子のことを学校恐怖症とよぶことがありますが、そのうちでも、幼稚園や低学年に発生するものは親とのむすびつきがつよく、それが原因としても重要であるようです。

だが、ここであげた例は、偶然にも女の子ばかりになりましたが、もちろんこの問題は女の子に特有のものでなく、男の子にもよくみられることをおことわりしておきたいと思います。

（国立精神衛生研究所）

＊　＊　＊